

## 命の波立ちを幻視する

## 『「装飾」の美術文明史』(鶴岡真弓著)

ポーランドで落ち合った鶴岡真弓は妙に着膨れしていた。ウズベキスタン調査のためドール紙幣で身体をびっしりと包んでいたのだ。とっさに連想したのが小泉八雲の「耳なし芳一」。身体に字を刻み、御札で体表を覆い尽くす祓除(はつじょ)の魔術が、「飾」の起源をなす。

装飾文様に思考の権利を授けるうえで、著者は大きく貢献してきた。ユーラシア大陸西端のケルトと極東の島国日本。本書はその両者をサマルカンドの地に交差させる。地球大の広がりを獲得した東西の往還。それはまた著者に、宇宙と身体との交響をも体験させる。

天空の星座は宇宙の奏でる天の文(あや)。そのコスモスの装いに呼応する人間の営みこそ、化粧(コスメティック)の語源ではなかったか。

天文と人文との交信が描く文様の綾(あや)。それゆえ装飾には理性を不安にさせる魔性が潜む。秩序の崩壊を誘う無限軌道の想像力が、文様の磁場には充満しているから。

物の輪郭とは物体の内部にはなく、外部に触れた表層の描く軌跡だとレオナルド・ダビンチは語る。

物と精神の臨界にはおのずと綾が生まれると、中国古代の文論「文心雕龍(ぶんしんちょうりゅう)」は説く。構造主義言語学の始祖ソシュールの波の比喩(ひゆ)が想起される。ヒトの言語もまた、宇宙と精神の臨界に立つさざ波の織り成す模様なのだから。

もはや、装飾の根源性は明らかだろう。近代西歐の合理精神の秩序志向によって、文明の未開状態の証拠、知的営みの副次的な寄生物との烙印(らくいん)を押され、従属的な場所に追いやられていた装飾。だがここには自然に畏怖(いふ)する人間の、起源の情念が露呈し、知性万能主義の価値観の限界を補完する。

自然という素材に逆らわず、その肌合いとの交歓に作品構想の靈感を求めるウィリアム・モリス。完成ではなく生成の歩みを「愛の労働」と感じむこの芸術家の「柳の枝」の壁紙に、著者は「深く呼吸する自然」の息吹を感じる。「決定でなく暗示」によって可能性の芽を伸ばす装飾。著者はその発芽細胞を読者に植え付けてはぐくむ巫女(みこ)と化す。(稲賀繁美・国際日本文化研究センター教授)

(NHK出版・2310円) = 2004年11月4日 © 配